

2022 年度小委員会活動成果報告

(2023 年 2 月 12 日作成)

小委員会名	屋外空気環境小委員会	主 査 名：富永 禎秀 就任年月：2016 年 4 月
所属本委員会 (所属運営委員会)	環境工学委員会 (空気環境運営委員会)	委員長名：秋元 孝之 主 査 名：長谷川麻子
設 置 期 間	2019 年 4 月 ～ 2023 年 3 月	
設 置 目 的 各年度活動計画 (箇条書き)	<p>快適な屋外空気環境の形成に重要となる課題について、現状の技術水準を明らかにするとともに、それらを適切に利用するための技術資料を論文や刊行物として整理することを目的とする。</p> <p>初年度：ガイドブックの刊行、講習会の開催 2 年度：研究成果及びガイドブックの広報、風環境評価体系の課題整理 3 年度：風環境評価体系の課題整理、新たな体系化に向けた議論 4 年度：新たな体系化案のとりまとめ、公表</p>	
委員構成 (委員名 (所属))	<p>委員公募の有無：無</p> <p>主査：富永禎秀 (新潟工科大)、幹事：菊本英紀 (東大生研) 委員：義江龍一郎 (東京工芸大)、飯塚悟 (名古屋大)、大岡龍三 (東大生研)、持田灯 (東北大)、大風翼 (東京工業大)、白澤多一 (大妻女子大)、有波裕貴 (新潟大)、片岡浩人 (大林組技研)、土屋直也 (竹中工務店技研)、弓野沙織 (鹿島建設技)、佐藤大樹 (大成建設技セ)、佐々木澄 (清水建設技研)</p>	
設置 WG (WG 名：目的)	<p>・風環境評価体系検討 WG (主査：大風 翼) 現状の風環境評価における課題を整理するとともに、新しい体系化に向けた情報収集や意見集約を行うことを目的とする。</p>	
2022 年度予算	100,000 円	ホームページ公開の有無：無 委員会 HP アドレス：

項 目	自己評価
委員会開催数	1 回 (オンライン) (年度内計画を含む)
刊行物 (シンポジウム資料等は除く)	
講習会	
催し物 (シンポジウム・セミナー等) *能力開発支援事業委員会承認企画	第 31 回空気シンポジウム『都市の風 50 年：これまでとこれから』(オンライン) 2022 年 9 月 4 日 (日) 13 時 00 分～17 時 00 分 有料参加者数 116 名
大会研究集会	
対外的意見表明・パブリックコメント等	
目標の達成度 (当初の活動計画と得られた成果との関係)	コロナ禍の影響で 2 回の延期を経たが、かねてから企画していた空気シンポジウムを成功裡に開催することができた。また空気シンポジウムの企画、シンポジウム中やその後の議論を通じて、都市風環境に係わる課題認識の共有や論点の整理を行うことができたと考えている。
委員会活動の問題点 ・課題	AIJ-ES などの諸基準の枠組みで予測・評価手法をどのように体系化しているかという課題については、具体的な検討作業には至らなかったため、さらなる情報収集や意見集約を行う必要がある。

- * 小委員会活動成果報告書は本書式を基本とする。ただし、それぞれの本委員会において活動実績を報告する共通項目があれば、最下段に項目を追加して記述してもよい。
- * 中間年度には中間評価を、最終年度には最終評価としての自己評価を記入すること。

環境工学委員会用 自己評価欄

2022 年度 小委員会活動 自己評価

(中間年度評価・最終年度評価)

総合評価 (4 段階評価)	A	B	C	D
総合評価に関する 自由記述欄 (理由、特記事項等)	<ul style="list-style-type: none"> • 各種の CFD ベンチマークテストの内容や結果について整理、分析するとともに、LES の使用も想定した新しい風環境 CFD ガイドラインを取りまとめた。それらの検討成果は、審査付き論文や国際会議等で公表された。 • 上記の結果も盛り込んだ「都市の風環境予測のための CFD ガイドブック」の最終編集作業を行い、2020 年 1 月に刊行した。また同ガイドブックをテキストとした講習会を開催し、会場 105 名、動画配信 15 名の参加を得た。 • 小委員会および傘下 WG において、最近の都市風環境評価に係わる研究成果を持ち寄った勉強会を開催することによって、現状の風環境予測・評価の課題を共有するとともに、今後の小委員会の活動方針・内容の方向性を確認することができた。 • コロナ禍の影響で 2 回の延期を経たが、かねてから担当小委員会として企画していた空気シンポジウムを 2022 年 9 月 4 日に成功裡に開催することができた。オンラインで開催し、116 名の有料参加者があった。またシンポジウムの企画、シンポジウム中やその後の議論を通じて、都市風環境に係わる課題認識の共有や論点の整理を行うことができたと考えている。 • AIJ-ES などの諸基規準の枠組みで予測・評価手法をどのように体系化していくかという課題については、具体的な検討作業には至らなかったため、さらなる情報収集や意見集約を行う必要がある。 			

- 総合評価は 4 段階(A>B>C>D)にて、自己評価すること。
- 中間年度における自己評価は、単年度の活動計画・目標に対する達成度にて、最終年度における自己評価は、小委員会の設置目標に対する達成度にて評価する。自己評価の目安は以下の達成度レベルを参照のこと。
 - A 評価：小委員会設置目標に対し、80%以上の達成度
 - B 評価：小委員会設置目標に対し、70%から 80%の達成度
 - C 評価：小委員会設置目標に対し、60%から 70%の達成度
 - D 評価：小委員会設置目標に対し、60%以下の達成度
- 小委員会の活動に対し、第三者的評価・外部評価 (シンポジウム、セミナー等の催し物を開催した場合に収集した参加者の評価など) に相当する情報がある場合には、その内容も記述すること。